

井守神社と御井の真清水



海拔約50m。平坂山の麓にある。

大宝元年、宇摩大領越智玉澄（おちのたまずみ）が、宇摩郡の西部に居を構えたときに、井の上に三島大神を勧請したと伝えられている。天曆6年、現在の場所に奉遷し、御井の神を合祀し井守大明神と称えるようになる。祭神は、大山積命（おおやまつみのみこと）、高甕神（たかおかみのかみ）、大雷神（おおいかづちのかみ）。

井守神社の社叢は四国中央市の天然記念物に指定されている。神社全域がクスノキ、スギ、ソメイヨシノ、エノキなどの巨木に覆われ、本殿の裏手には目通り5.5mのカヤもある。

また、宇摩郡5郷（山田、山口、津根、近井、余戸）の近井郷は、井守神社の社叢から湧き出る御井の水（御井の真清水）を中心に繁栄したものである。道路を挟んで東の出水と西の出水があり、東の出水には水神様が祀られている。

境内には「天智帝衣掛けの岩」と伝えられる石があり、中大兄皇子が齊明天皇に従って道後へ向かう途中、井守神社の出湯で湯浴みされたときに衣を掛けた石と伝わっている。

天正年間には、渋柿城主薦田氏の祈願所となり、後に幕領となる。